



新しい年は「ファン目線」で

2013年、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひ致します。…と、毎年のことながら実はこの記事を書いているのは、2012年12月半ば。ちょうど総選挙が終わり自民党が圧勝し、3年半ぶりの政権交代が現実のものとなったところです。その少し前からは、いわゆる“安倍相場”と呼ばれる円安株高状態がニュースや新聞記事を盛り上げ、何となくですが巷には「来年は少し景気が良くなって、いい年になるのではないかな…」といった雰囲気を感じられるようになりました。こうしたことは、特に東日本大震災以降見られなかった上昇機運といえますから、何とか現実のものになってほしいと願うばかりです。

一方、やはり今年引き続き気になるのは「ファン離れ」が深刻な状況となっている遊技業界でしょう。単純に考えれば、巷の景気が良くなって余裕ができれば、レジャーに使うお金も増えて来る…つまり、パチンコやパチスロで遊ぶ人が増えるのでは…という期待があります。ところが、昨年発表された「レジャー白書」を見ると、今後やってみたいレジャーという項目に、残念ながらランクインしていませんでした。私自身もちろんパチンコが好きでよくホールに行っていますが、体感

的に言えば新たなファンがどんどん来るのではなく、いわば「少数のマニア層から売り上げを頂戴している」ニッチなジャンルになってしまったのかなあと思うのです。

その原因としては、よく言われる通り「お金がかかり過ぎる」ことや「ゲーム性がよく分からない」あるいは「うるさい、雰囲気が悪い」などといったことが挙げられると思いますが、逆に言えば「それでも遊びたい」という人は一定数いるということですから、以前から書いている通り、そうしたファンからよく声を聞くことが急務なのかもしれません。

また、冒頭書いた円安株高状態が財政投資の緩和期待から起こっているように、遊技業界でも、もう少し自由度を持たせる緩和があってもいいのではないかと思います。結局、規制は個人経営や中小チェーンなど底上げ期待を持ちたいところに打撃を与えて、寡占状態を進めているのですから、一考の余地があると思います。

2013年は、ファンの一人としてももっと自由度の高いサービスをはじめ、予算や時間に応じた幅広い機種選択ができるような環境を望んでいます。この業界は、過去の「成功体験」にものごく振り回されやすいところがありますよね。もちろん、前回書いたように過去の分析は大切ではありますが、それを踏まえ、ファンとの対話やゲーム性自体の一考など、レジャーを提供してあげているという意識ではなく、同じ目線で考えていくといった姿勢が広がるよう、期待したいと思っています。

もちろん、前回書いたように過去の分析は大切ではありますが、それを踏まえ、ファンとの対話やゲーム性自体の一考など、レジャーを提供してあげているという意識ではなく、同じ目線で考えていくといった姿勢が広がるよう、期待したいと思っています。



じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(バジリコ、07年)